

## 森友・加計「うみ」なぜ生じた

標題は朝日新聞 4 月 16 日朝刊「考 X 論」。安倍政権のもとで、政官関係のゆがみを示す事態が次々と発覚している。安倍晋三首相が出し切ると言う「うみ」はなぜ生じたのか。その責任は誰に帰するのか。長谷部恭男・早稲田大教授(憲法)と杉田敦・法政大教授(政治理論)に語り合ってもらった。



久しぶりに「考 X 論」を紹介する。ここでは、長谷部教授の発言から。

「何よりもまず問われるのは安倍内閣の政治責任です。一連の問題の発端は首相にあり、だからみんなでかばっていると多くの人が疑っている。首相が素直に責任を認める、あるいは司直の手で事実が解明される。何らかの形で問題の核心が明らかにされない限り、行政組織がまともに説明責任を果たせるはずがありません。」

「疑惑を晴らせるのは首相しかいない。その努力をしないと、「推定有罪」とは言えないまでも「グレー」の状態が続くでしょう。政権擁護派の、いつまでモリカゲをやっているのか、国会にはもっと重要な政策や法案の審議が期待されているという指摘にも一理ある。だとすれば、これほどの疑惑に取り囲まれて消耗し、押し潰されそうになっている政権には早く交代してもらい、正常な国政を回復しなければなりません。」

「憲法は国民の中長期的な利益を実現するための社会の根本原則を定めるものです。それを変えようというならまず、自身の身を厳しく正してもらわなくてはなりません。すべての国民のための政治ではなく、「お友達」の特殊利益を優先する政治を進め、立憲主義の底を踏み抜きそうになっている政権が憲法を変えることには当然、非常に不安を覚えます。」

次ページ 4 面掲載の高橋純子・編集委員「政治断簡」も抜粋して紹介したい。

「国会で議論すべきことは他にもたくさんある。〇〇問題一色になるのは残念だ。私は必ずしも安倍政権支持ではないが、野党は対案を出さずに批判ばかり。もっと政策を議論すべきだ」

以上、男もすなる「憂国しぐさ」といふものを、女もしてみむとてするなり。①議論すべきことは他にもあるという〈嘆息〉②私は「中立」だという〈弁解〉③野党は対案を出せ、政策論議をせよという〈すり替え〉一が基本セット。

それにしても、である。政治という営みはいつから、政策論議に矮小化されるようになったのだろうか？



畑の土が汚染されていることがわかった。もうこの畑で作物をつくるのは無理ではないかという議論をしている時に、いつまで土の話をしているのか、ニンジンやジャガイモをうえるか議論すべきだ、冷夏への備えも必要なのに、対案を出さず批判ばかりして……などと言出す者は正気を疑われる。

政治だって同じだ。主権者はいわば畑のオーナーである。選挙で多数をとった政権に任せていたら、あったものがなかったことにされたり、ないと言っていたものが出てきたり、トラック何千台でも運び出せないほどのゴミが畑に埋まっていた。

さあ、どうする？

責任を問う。信頼できないなら辞めさせる。主権者の当然の務めだ。もちろん、信頼などどうでもいい、成果さえ上がればいい、という立場もあり得るだろうが、それはもう政治ではなくビジネス、それもかなりブラックなビジネスの感性と言わざるを得ない。

政治がリーダーシップを発揮して官僚組織のうみを出し切るなどという言も聞こえてくる。寝言はせめて寝てからにして頂きたい。リーダーシップとは責任を取ることと表裏一体のはず。官僚にのみ責任を押し付けた上で発揮される政治のリーダーシップなどあり得るのか。

(2018年4月18日)